

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士(文学)	氏名	脇山 佳奈
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 小型仿製鏡をめぐる考古学的研究			
論文審査担当者			
主査	教授	古瀬	清秀
審査委員	教授	三浦	正幸
審査委員	教授	竹広	文明
審査委員	准教授	野島	永
審査委員	広島大学総合科学研究科・教授	佐竹	昭
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、わが国古墳時代における小型仿製鏡について、鏡式ごとにその在り方を明確化し、それらが古墳時代社会において果たした意義を体系的に論じたものである。第1章から第9章の全9章で構成される。まず第1章「本書の目的と課題」では、これまでの小型仿製鏡に関する研究史を詳述し、研究の方向性を見定め、その方法を提示する。第2章「素文鏡の研究」では、もっとも小型で簡素な素文鏡は鈕の形態から2種に分類でき、円鈕のものは前期に盛行し、畿内を中心に分布することから、大和王権による製作、配布を想定した。もう一方の鼻鈕のものは主に集落や祭祀遺跡から出土し、畿内王権に関連する祭祀場での祭器と位置づけた。第3章「重圏文鏡の研究」では、重圏文鏡は弥生時代後期に出現し、古墳時代前期に盛行した鏡式で、大和王権が政治利用のために製作、配布したものとした。小型仿製鏡群の中では、最初期における大和王権の階層秩序構築の一端を担ったと論じる。</p> <p>第4章「珠文鏡の研究」では、珠文鏡は古墳時代を通じて製作され、分布の在り方から畿内での生産と配布を想定する。九州南部から朝鮮半島まで広く分布することから、王権の政治秩序維持にもっとも貢献した鏡式と論じる。第5章「内行花文鏡の研究」では、内行花文鏡は小型から中、大型まで仿製されるが、その文様の在り方を見ると、小型鏡が中国鏡に近く、最初に小型鏡が製作されたと論じる。そして前期には小型から大型まで揃うが、大型鏡が畿内に多く、中～小型鏡が畿内周辺、地方で出土することから、大和王権の階層秩序構築にもっとも重要な役割を果たしたことを指摘する。第6章「石製模造鏡の研究」では、石製模造鏡は前期後半になって小型仿製鏡群の影響を受けて製作され、多くは祭祀に用いられ、東北や朝鮮半島にまでその分布を広げることから、国家的祭祀との関連を指摘する。第7章「土製模造鏡の研究」では、土製模造鏡も小型仿製鏡の影響を受けて製作されたが、権威ともっとも離れた鏡群とした。</p> <p>第8章「小型仿製鏡生産技術の変化と画期」では、小型仿製鏡の鈕孔やその断面形、原料の鉛同位体比の分析を行い、生産技術の検討を行った。その結果、重圏文鏡は弥生時代末から古墳時代初頭に生産され、珠文鏡は華南産鉛使用青銅や華南産鉛と華北産鉛を混合した青銅を原料とするものがあり、その生産が一様でなかったことを明らかにした。第9章「結論」では小型仿製鏡群の出現から発展、終焉までに4段階の画期があったことを論じる。まず第1期の出現期は、畿内を中心に大和王権の成立とともに円形を呈する鈕孔をもつ重圏文鏡や内行花文鏡の生産が始まり、第2期の普及期は、大和王権が階層表現に面径による大、小を重視し、小型仿製鏡も各地に配布される段階とした。第3期の拡散期には大型仿製鏡が衰微し、小型仿製鏡群が中心となる。畿内周辺地域や地方、朝鮮半島への拡散が見られる。第4期の衰退期は、鏡がもつ政治的役割が減退する段階で、小型仿製鏡も素文鏡をのぞいて終焉を迎えるとする。</p>			

以上に示したように、本論は、小型仿製鏡群が大、中型鏡式群と同様、支配階層の中で一定の威信財的意味を有することを明らかにしたものである。これまで青銅鏡研究といえば大、中型鏡中心であったことは否めず、また小型鏡研究においても個別研究が主であった。そういう意味においても今回の研究が小型鏡、特に仿製鏡のもつ意義を体系的に明確化したことはきわめて高く評価でき、斯学の発展に資する重要な論文といえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。